

## 乳児の描画について一考察（3歳未満児）

勝 木 と み

Tomi Katuki

20数年前、保育界に於て「幼児画」の研究がさかんにおこなわれたことがあった。

近年は、関心度が少しうすれてきたが、乳児保育が重要視されてきた現在、まだこの期の描画についての関心をもつ人は少ない状態である。

幼児画の研究の中で、清水元長氏は乳児の描画の発達を系統的にとらえておられる貴重な方であるが、他にはあまりみられない。心理学、精神分析学、生理学など多くの学者は、それぞれ独自の立場で、子どもを部分的にとらえているのが現状である。

しかし、ルソーは「子どもの初期の発達は、すべてが殆ど同時に起こわれる。話す、食べる、歩くは殆んど同時に学ぶ。これらが正確にいて人生の最初の時期だ」と、いっている。

乳児期の発達は、胎児期の発達にひきつづき、最も著明な形態的な増大を示す、と同時に身体諸器官の発達も、形態的にも、機能的にもすばらしい発達をするのである。

そこで、乳児の描画発達を主としながら、単に描画という外面からの発達のみでなく、身体発達、知的発達、生活習慣も含め諸諸の角度から実践の中で子どもを見つめながら理解し、その発達を助長させたいと思う。

まず、学者の分類からその発達をとらえてみると「芸術による教育」の著者ハーバード・リードは、2歳から4歳までを「錯画期」と、いっている。それは、目的のない、ねらいをもたない「なぐりがき」からはじまって、目的のある「なぐりがき」に至る段階と、とらえている。

線で表規されているものをみて命名している4歳を「線の時期」とし、この期は人形をさかんに画くが、頭は円、目は点、足は対の線という表現をする。

5歳から6歳を「叙述的象徴の時代」といい、形は次第にととのってくるが、粗末な「象徴的な略画の時代」と分類している。

又、「芸術による人間形成」の著者ローウェン・フェルドは、2歳から4歳までを「なぐりがきの段階」とし、4歳から7歳までを「様式化前の段階」と分類している。

これら2人と同じような分類をしている他の諸学者の説に対し「幼児と造形」の著者清水元長氏は、2歳から4歳までを「錯画期」又は「なぐりがきの段階」という説に異論を発表している。

それは「錯画」の「錯」は「誤」と同義語であるから「誤りの絵」ということになる。大

人の絵を、完全なもの、正しいものという感覚でとらえているから子どもの絵に「誤」という言葉をつけるのであって、乳児画は決して「誤」ではない。描画は発達の中で大切な位置をしめている、といっている。

辞書にも「錯」は「誤」と同義語とある。

実際、子どもは、いいかげんで画いているのではない。目の輝き、体の動きを見ていればそれは感じられる。「子どもは背中で絵を画く」といわれるくらい体全体で画く。その中で運動機能の発達も、知的発達もするのである。

それでは実践の中で、それらを考えてみたいと思う。

先づ乳児は、いつ頃から、どんな画き方で、何をかき、その中でどんな発達をしていくのか、清水元長氏の研究とあわせてとらえてみたいと思う。2歳にならないと画けないのだろうか。

乳児は、かなり早くから描ける状態になる。2歳になってから描き出すのではない。一応つかまり立ちが出来、ものが握れ、片方の手を振りまわしてもなお上半身が保てる状態、つまり、お腹を机につけてよりかかるようにし、支えて立てる状態になれば画ける。

クレヨンの持ち方は、タイコのパチを持つような、又は、初期のスプーンを握るような方法で、親指と4本の指で掌の中ににぎり込む持ち方である。これらは普通、10～12カ月ぐらいであるが、環境の影響が大きく、絵を画く材料が手近かにあったり、大人や年長児が絵や文字をかいている姿を身近に見ることにより、その興味は左右される。某保育園の乳児室では9カ月から画きはじめた子どもがいる。又、2歳半になってはじめて材料を手にする子どももあり、親たちの関心のないところでは描画活動への出発がおくれるのは当然である。が、大体、1歳すぎの乳児に現れるのが普通である、勿論、まだ、描画という状態にはなっていない。その頃の描画を清水元長氏は「描画発生の時代」といっている。

描画という状態で表現されていなくても、紙面をこすっているので手の運動の痕跡が描画として記録されるのである。これは点とも線ともつかないものであり、すぐに材料を投げ出してしまう。

材料を握り、小指を下にしてテーブルを叩いている。そこに現れる点を清水元長氏は「描点」といっている。図1は1歳4カ月児が描いたもので、大人の描点と異り紙面に広く描かれる。クレヨンをつきつける時は、視線は必ずしも紙面を見ていないので、紙からはみ出す時もある。たまたま結果を目で確認しているが長くつかない。

その頃、つまり歩行が完成する頃、線らしきものがみられる。しかし、まだ画面に対し同じ姿勢が保ちにくく、腕の運動も円滑に働かず、材料を手の中で一定の状態で保持することも困難であるため、手の中で回転したり、筆圧とクレヨン保持のための力のバランスがとれず画面に対し角度が垂直、又は、はねるという不定期のために、そこに現れる線はよろよろと不規則であり、特徴的なことは、その線は濃淡があり、方向は一定しない。この線画きを

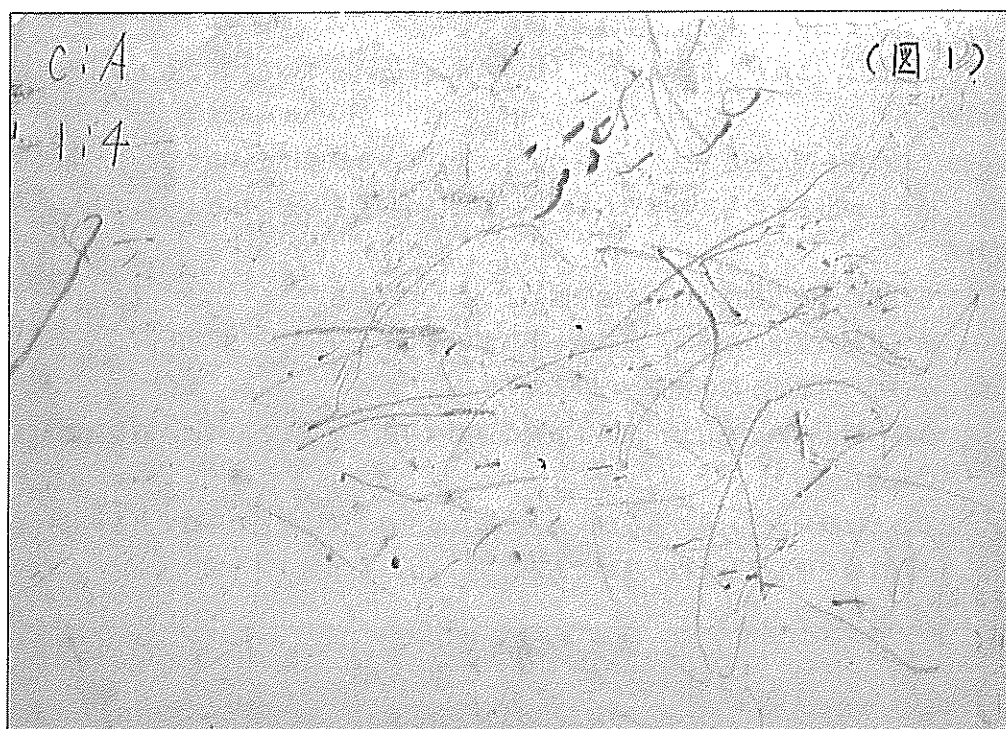


図 1

(C:A, 1:4)

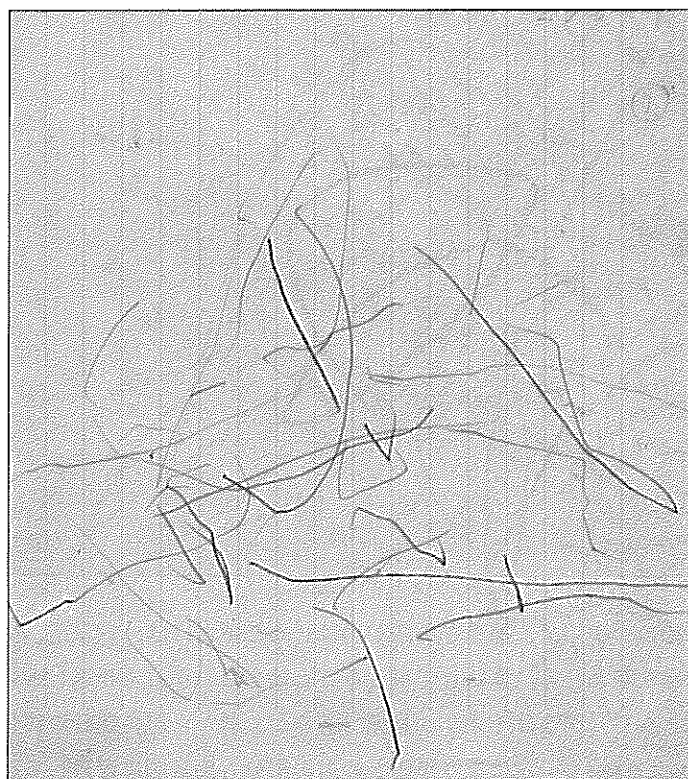


図 2 (C:A 1:4)

ローウェンフェルドは「末分化的描線」というている。

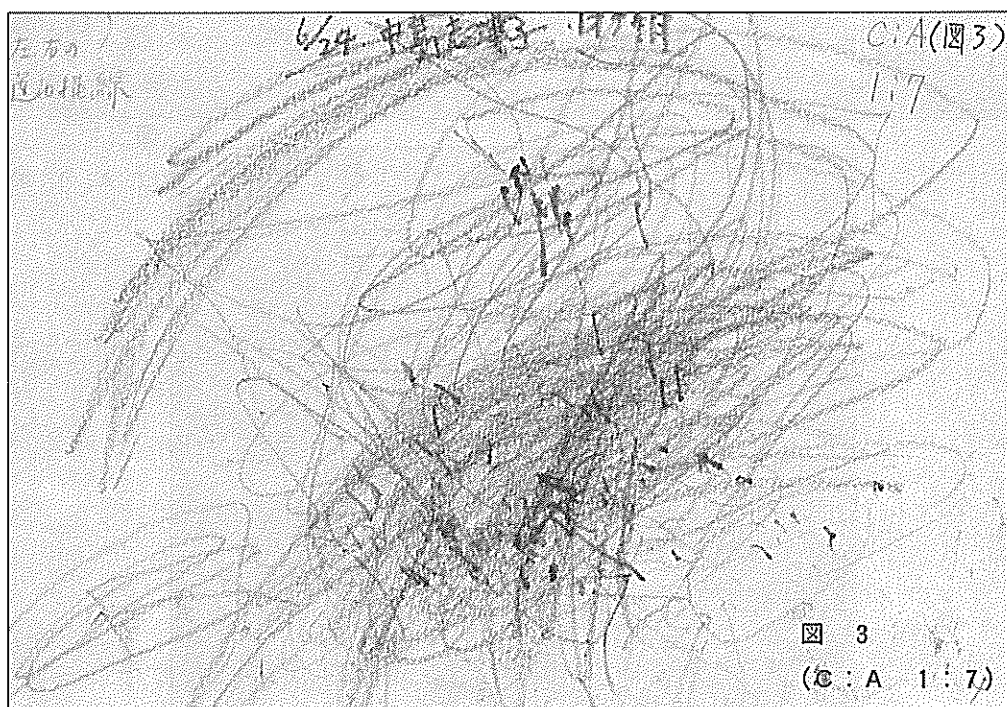
清水元長氏は、これから2歳頃までを「試みの時代」というている。図2も1歳4か月児の描画である。

気まぐれに棒を持たせると、クレヨンのように画いてみるが画けないのでクレヨンを要求する。指さしが出来るのもこの頃であるが、能動的に外界をとらえられるようになったとみられる。

子どもの運動機能の発達には、ある原則のようなものがある。

- (1) 粗大運動の発達の順序は、頭部から下肢部へとすすむ。
- (2) からだの中枢部から末梢部へとひろがる。
- (3) 全身の粗大運動が先行し、次第に微細な運動が可能となる、と同時に、随意運動が次第に発達していく。

上記のことは既知のとおりであるが、大人の描点は手首、又は指先の運動であるのに対し乳児のそれは肩を中心とした粗大運動である。



この歩きはじめにつづいて、簡単な単語が出はじめた頃とほぼ一致して、やや不規則ではあるが、往復描線が現われる。連結して現れることは少ないが、くり返し画いている間に次第に連結的描線となる。図3は1才7か月児であるが、肩から肘の運動に移行してくるし、手の中のクレヨンの保持も一定になり筆圧と力の配分も感覚的に習得してきたと考えられ

る。

1才後半の往復描線は、左右の振幅はややリズムカルに描かれる。

左右の手にクレヨンを持たせると、優位の手の描線は濃く、往復描線もやや振幅をもって

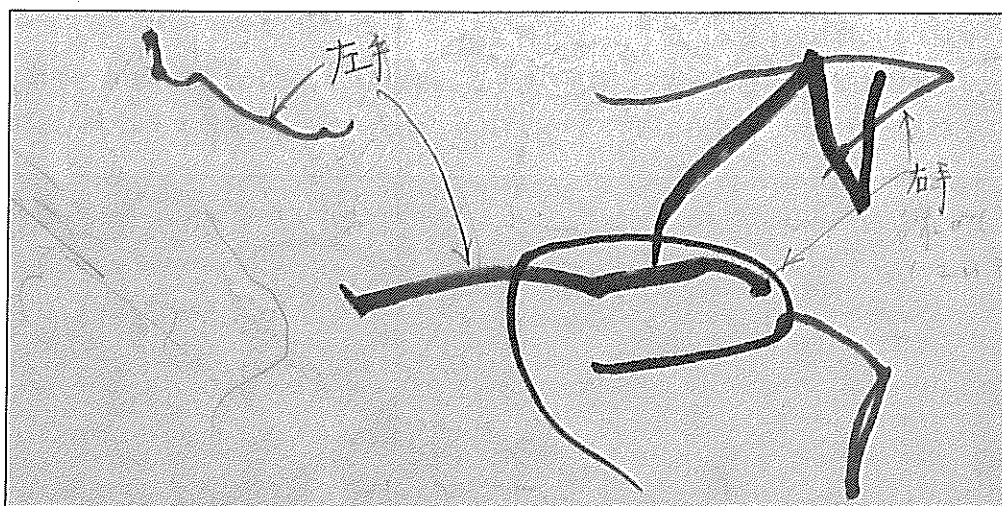


図 4 (C : A 1 : 9)

描くのに対し、ついの手の描線は、ぎくしゃくした末分化的描線ですぐにクレヨンを投げ出してしまった。図4は1才9か月児で、左右の優位差がみられる。

肩から肘へと発達してきた運動機能は、描画に現われるだけでなく、ボールを投げるような行動にも現れる。

スプーンのつかい方はまだ下手で、茶碗のものをすくってのもうとするが、汁物をこぼさず口まで運ぶのはむりである。

肘の機能が発達してきたとはいえ、まだ位置が固定しないために、線が同じところを通らない。

包装紙を与えると、空白をさがし、自分が移動して描くし、紙面の内と外を考えて画くようになる。しかし、コントロールを失なったり、紙面から視線がはなれたりし、はみ出すことがある。はみ出した時は困った顔をしたり、片方の手でそのはみ出しをなでている。

この頃、しきりに「いや」という否定語をつかうが、描くものの中に斜線が現れる。清水元長氏は「これは、不安定な精神状態の時で、大人に描画を中止されたがもっと描きたいという要求が通らない時に横斜線が交って現れる」という。又、「否定の記号と同じ意味があ

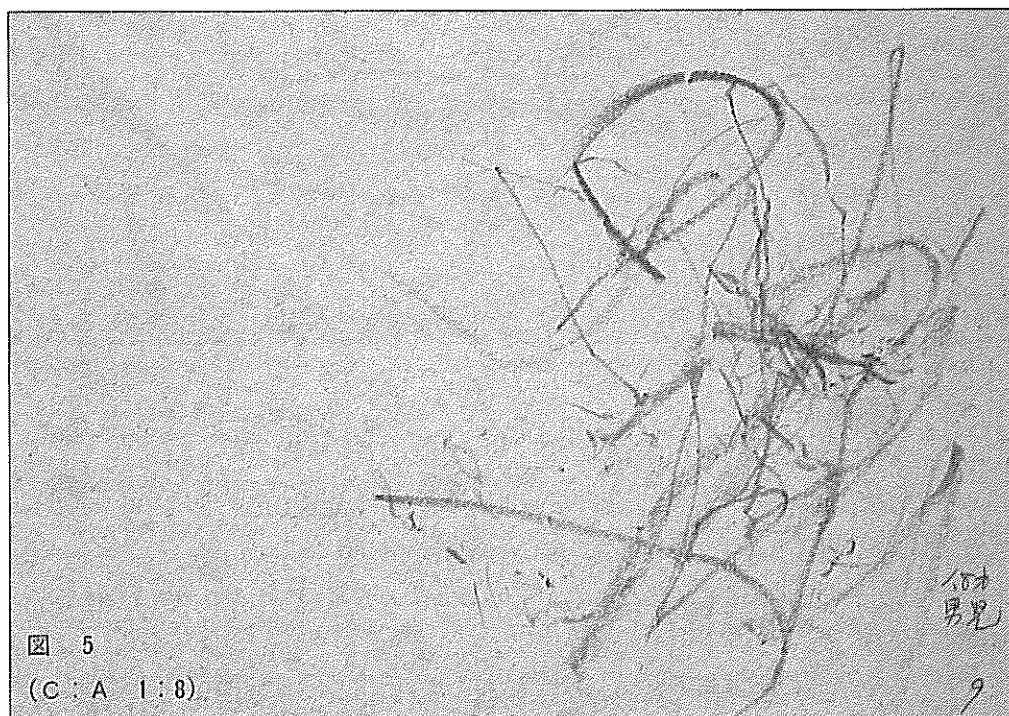
り、分化された感情の働きである」と述べている。

大人でも否定の感情を現すとき斜線をつかうので同じ心理状態であろうが、機能発達の面からみると、肩と肘がともに働くとき斜線が画けると思われる。

2才前後の歩行がしっかりし、身体独立期と云われる頃になると、自分の意志で行動でき、赤ちゃん臭さがぬけ小さな紳士といわれるようになり、強情期と云われる頃、たて線が現れる。

クレヨンの持ち方も3本の指でしっかり持てる。

2才半頃になると、折返し点で、鋭角の折り返し線が現れる。これは手首の器用さを増してきたとみられるが、くり返し画いているうちに、それがスムーズに動くようになると、折

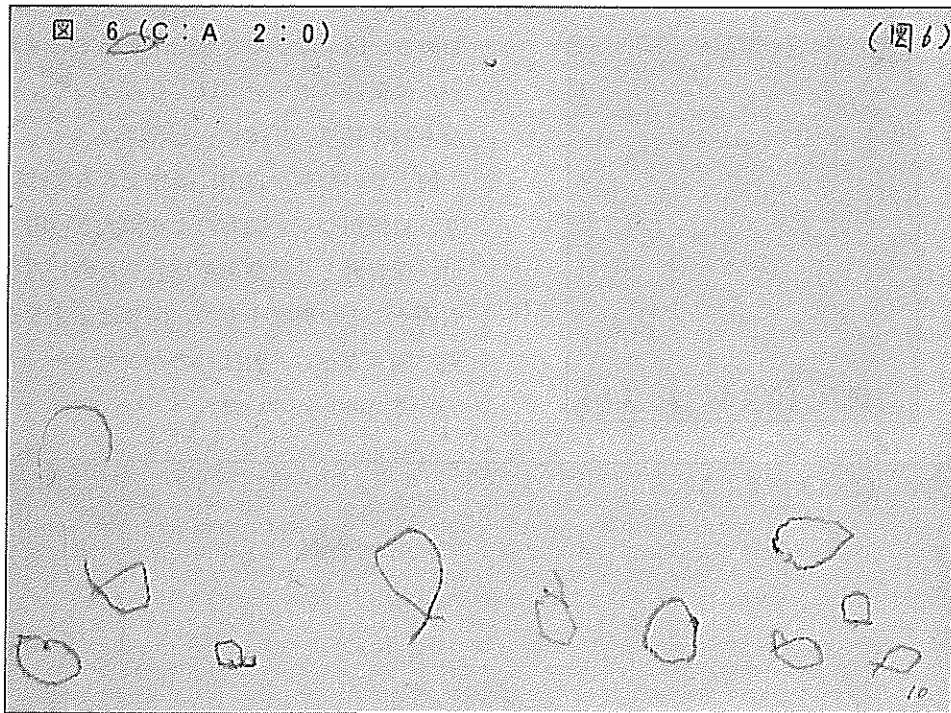


り返し点で円型のカーブをもって戻ってくる。図5は1才8ヶ月月児である。肩、肘、手首の運動が器用になってくると、次につぶれた円らしきものが現れる。

これが、初期の円運動描線であるが、紙面に制約され、はみ出しそうになると戻ってきて円を描くので、つぶれたような円らしいものとなるのである。が、このつぶれたさまざまな円らしいものをいろいろに見たてて、自分の内部のイメージを投入させ、名づけるようになる。「とと（魚）」「じんご（りんご）」など、それらしいものを画く。

これをくり返ししながら次第に円の完成期に入る。しかし、出発点に戻るのに苦勞している。描かれた円はさほど大きくなく、大きくて5 cm～6 cm、小さいと1 cm～2 cm ぐらいで沢

山描いてよろこんでいる。大きい円は手首と指との運動であり、小さい円は手首を固定させ、指に力を入れている。体の中枢部から末梢部へと発達し、全身の粗大運動から微細な運動へ



と次第に発達していく子どもの姿が描画にみられるのである。

内攻性の子どもで、おずおずと紙のふちに沢山の円を描く姿をみた。図6は2才児の描画であるが色もうすい。紙のふち、又はすみに小さく画く子どもは気が小さいと云われる。又、紙のふち、すみは精神的に安定するともいうが、自信がでてくると中央部に画くから、しいて中央部へとさそわないで、思うように画かせることが大切である。一般に子どもの画くものを見ていると、体力を強くもっているエネルギーな子どもは画面に強く画く、時には乱暴と思われる場合もある。子どもの画くもの、姿を見ながら日頃のその子どもの行動とあわせ考え、保育に留意していくことは保育者の大切な役割りであろう。

単独の円が次第に完全なものとなってくるということは、感覚的なものであるとともに知的なもので、その後の発達にきわめて重要な役割りを果たすので、グレッツインゲルは「根源的な円」と名づけて重視している。又、この円は「それは、とぎされた空間をつくり、円の内外は区別される異質の空間で、子どもが最初に獲得する基本的型態は円であり、これによって情報を視覚的に伝達する最も原始的で発生的な記号を得たことになるし、事物の全てを円で表示することが多い」とのべている。手の運動は脳の指示に従っている。

机の上で遊べる小積木を5つ6つほどたおさぬように積み上げられる。ドアのとお手をま



わせるようになるのもこの頃からである。3本の指でものを操作できるようになる頃、洋服のボタンをはずせるようになる。お箸も同じ3本である。

円を描きはじめると、大小の円を組み合わせたり、円と点を組みあわせていろいろ画きは

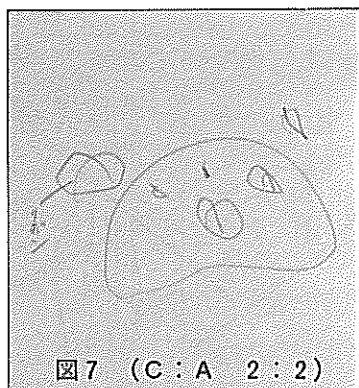


図7 (C : A 2 : 2)

じめる。図7は2才女児で、家庭でおばあちゃんに髪にリボンをつけてもらうので、描いたものを見て「りぼん」と告げた。

腕と手の動きが自由に操作できるようになり、自信がつくと図8のように大きい円も画け、保育者と「言葉あそび」をたのしみながら画くことに興味をもつ。図8は2才5か月児で画きながら「おばけのキュキュキュ」と云ってたのしんでいた。

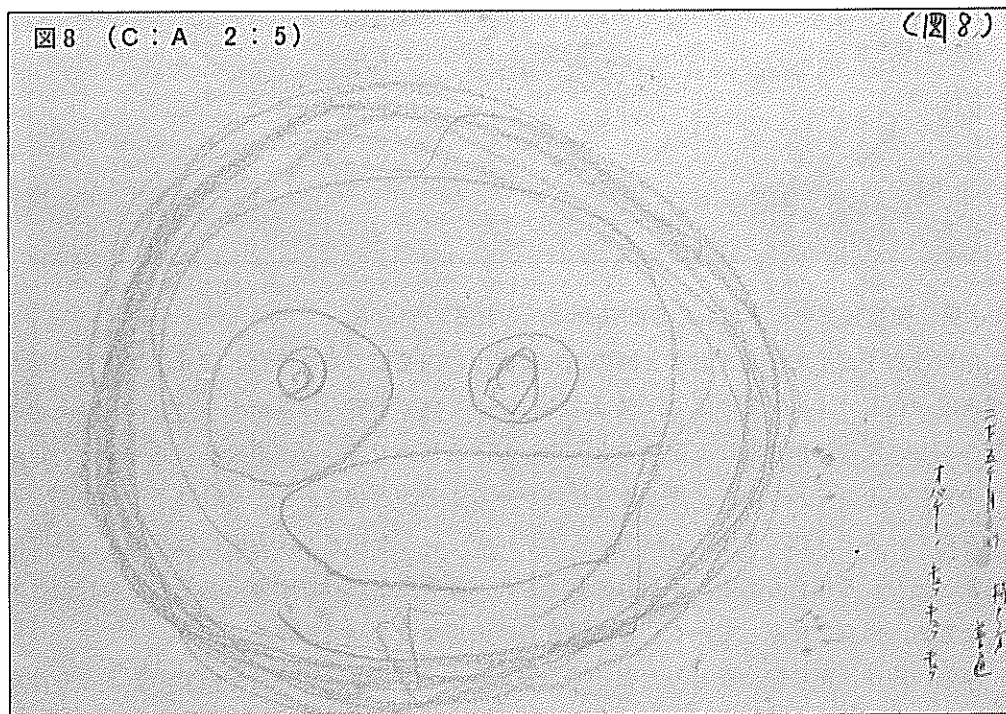


図8 (C : A 2 : 5)

(図8)

そして次に、単独の線が現れる。その線が偶然にくみあわさったのを見て「ヒコーキ」と云った。図9は2才11か月児で、その下に画いた往復描線を書きながら「ロケット、ヒューン、ダダーン、プー」と云った。ヒコーキもロケットもテレビか絵本でそのイメージを獲得しているので、脳裏にたくわえてある多くのイメージの中から類似のものを引き出しているのである。これは子どもが自分の内にもっているイメージをたしかめながら発言しているの



で、そばに居る保育者はともにそれを確認してやることである。これは大人になってからもよくあることである。

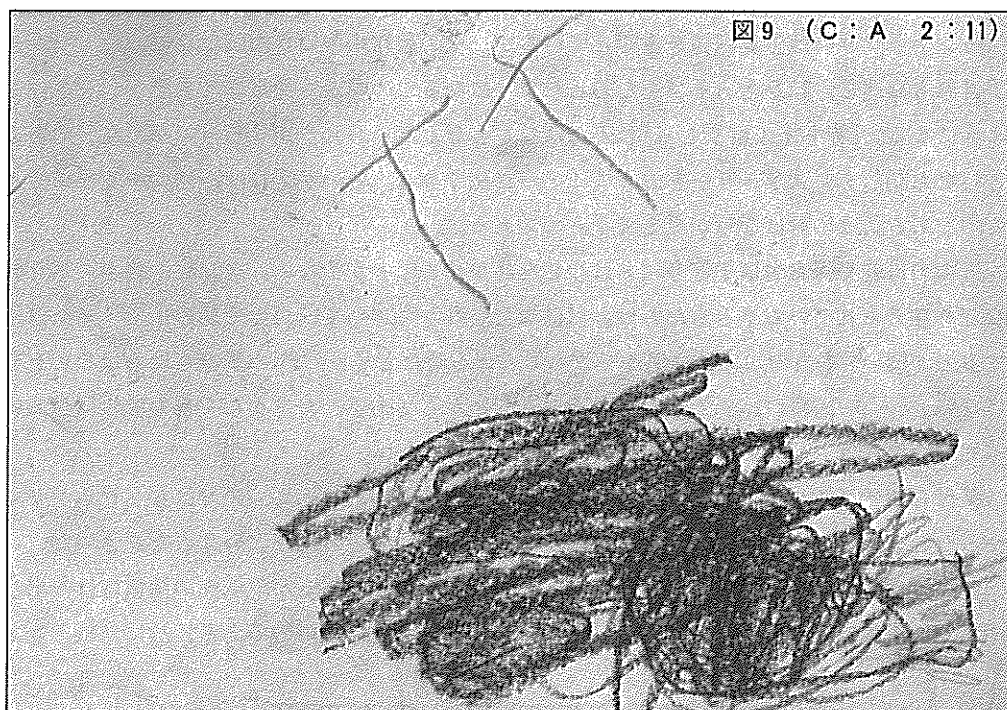


図9 (C : A 2 : 11)

ドイツの哲学者カッシーラが「人間はシンボルをあやつる動物」と定義しているように、これは成長のあかしといえるのである。又、子どもが私はこう見る、私は……、ということは自分を発掘したもので、個性や想像性、創造性はここから生れてくる。そのために保育者は自由に発言できる雰囲気づくりをしてやり、愛情あるこまやかな語りかけ、適度の質問、解答に心くばりをすべきである。

集団の場では、周囲の友だちも興味をもってくるが、次に身体表現でヒコーキになったりロケットになったりして部屋中とび歩くが、他児にはそのように見えないものかもしれない。故に言葉とともにイメージづくりをさせる事が大切である。共通のイメージを身体全体で確認しあった時、仲間として感じはじめるのである。こうして共通のイメージは拡大され、集団のたのしさもあるのである。

乳児の集団は乳児にのみまかせておいて好ましいと云えない。

こうして、つもり行動、みたてる行動が発達し、ダンボールを電車に又はヒコーキにみたててあそぶが、一つの箱に多勢がはいって各自のイメージを交錯しあいながら満足している姿をみるが、これを或学者は「渦」といっている。保育園の乳児室でこうした状態をよくみうけるのである。つまり、絵が、道具が行為をひき出していくといえるのである。

これら、感覚運動的描線から円運動への移行と、小円運動描線は知能遅退児にもみられるが、往復運動描線から単一描線への移行と、円運動からそれが独立円へという新しい領域への脱皮は出来にくいという。

モンテッソリーは感覚訓練を重視しているが、その教材の中に自由画はない。

言語も発達し、絵かきあそびをたのしむようになるこの頃から簡単な「お話し」をきけるようになる。「赤ちゃんばなし」「ねんねばなし」などといわれるが「ねものがたり」である。きいたお話しを、ストーリーをおってイメージ化できる。いいかえれば、頭の中で絵にできるのである。そのおはなしが見えてくるのである。

近頃の母親や保育者は子どもにおはなしをきかせることが少ない。テレビ、絵本、紙芝居などを与えられている子どもたちは、おはなしを耳からきいて、自分で頭の中でイメージ化する力が弱い。本当の知育とは何かを改めて考える時だと思う。「今の子どもはおはなしをきけない」「あまり喜ばない」というが、きかせないからである。おはなしを自力で絵にしてい

く知的な働きは、能動的なものといえるのである。

某保育園で3才後半の子どもたちに「3匹の山羊のがらわらどん」のおはなしをきかせてやったとき、1人の子どもが「おはなしがみえないよう」と叫んだということをきいた。

紙をタテにして与えてみた。図10は2才10か月児の描画であるが、紙面の両側ははみ出しやすく、下のほうに画いた。肘のコントロールがまだとりにくいのである。故に、紙を与え

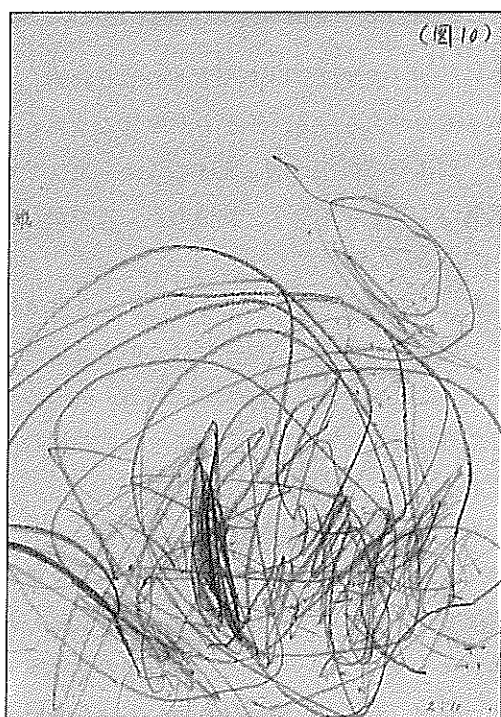


図10  
(C : A 2 : 10)

る時は横がよい。保育施設に於て、保育者が無意識で紙を横に与えているようすをよく見かけが「何故、横にして与えるのですか」と質問しても答えられる保育者は少ない。「いつも、こうして与えていますので」「考えたこともありません」「いけなかったでしょうか」と、答えがかえってくる。この「何故？」を問う姿勢をもってほしいと思う。これは描画だけではない。近頃の保育者の中に、この「何故？」を追求する姿勢が欠けていることは残念である。

ルソーは、子どもの教育には「時間をむだにすること」とエミールにかき「結論を急がない」と力説している。「時間をむだにする」とは、ゆとりをもって子どもを育てることである。2才前後の子どもは気まぐれ屋で、気がむかないと何日も画かない。かと思うと興味をもつと何枚もつづけて描く。が、それと異なり、生活の中で毎日、同じ場所で、同じ椅子でないと食事をしない。同じ場所でないとひるねをしないという律儀なところもある。

このように3才前後に「いみづけの時代」から「想像的思考」へと自ら進んでいくのであるが、大人が考える絵らしい絵は3才後半にならないとむりである。大人は、円と線が画ければそれを組みあわせて簡単な絵ぐらい画けそうだと考えるが、十分に、時間をかけて画かせることが乳児期の課題である。

3才前半でも、子どもが描いている時、「何を描いているの？」と質問すると、「描いてるの」と答える。粘土で遊んでいる時も、「何をつくるの？」ときくと、「つくってるの」又は、だまって答えない。出来てみなければわからないのである。性急な質問はひかえるべきである。

こうして「いみづけ時代」は長く、社会性が発達し、課題意識が芽生えてくる3才後半にならないと、目的をもって画く、又はつくることはむりである。

2才後半の肘、手首がスムーズに活動する頃、スプーンで汁物をすくい、こぼさずに口に運べるようになる。スプーンを水平をもって口まで運べるようになった時、はじめて「スプーンがつかえるようになった」という発達の域に達したのである。「スプーンをもてる」と「スプーンで汁物をすくってのめる」とはちがうのである。

ボタンがはめられるようになるのもこの頃である。

お箸は3本の指でもてるが、薬指をそえて4本指で上手に操作できる、つまり完全にお箸をつかえるようになるのは普通3才半頃である。水道の栓を止められるのも2才後半で、手首、指に力がついてきたことを示している。

ボール投げに力が入ってくるのも手首の回転に力が加わってきたことを示している。

次は、画く材料であるが、紙は画用紙かワラ紙がすべらなくてよい。幼い子どもだからもったいないと包装紙や広告の裏面に画かせようとするが、すべって画きにくい。紙の大きさも手の動きからみて大版の八つ切りぐらいがよい。又、画くための材料は線画きに適したものがよい。クレヨン、マジック、濃いめの鉛筆がよい。クレヨンの色は1色がよい。多く与

えると色であそんでしまう。或学者が「幼い子どもに与えるクレヨンの色は茶色がよいその理由は色素が少ないからなめでも危険性がない」と云われた。真儀のほどをその道の人にきいたが根拠がないということであった。私は、クレヨン、マジック、鉛筆などは最初からなめない習慣をつけることが大切だと思う。してよいこと、悪いことは1才頃から理解しはじめる。自由の美名のもとに放任を許してはならない。

クレヨンの色は黒か赤が線がはっきり出るし、赤は元気な明るい子どもが好み多勢の子どもが好む色でもある。又、黒板を下において画かせるのもよい。

これまで描画の発達を中心としてとらえてきたが、生活習慣というと、一人で茶碗をもってスプーンで一人で食べられる、衣服のボタンがはずせる、水道の栓が止められるなど部分部分をばらばらにとらえて子どもの発達をみているが、内面の発達はばらばらではなく、生活の中であそびをとおり広くみつめていくことを考えるべきである。

とかく多くの大人は、子どもの画いたものに対し、ことに乳児のかいたものに「まだ絵にならない」「さっぱりわからない」「何を画いているかわからない」「くだらない」という評価をして扱うが、それは誤ったみかたであることが以上のことから理解できると思う。

大人の不必要な干渉は子どもに自信を失わせやすいが、結果よりも内面の発達を重視しつつ充実した日々の生活をさせていくべきであると思うのである。

参考図書	幼児の描画	清水元長著	白眉学芸社発行
	イメージの誕生	中沢和子著	NHKブックス発行
	子ども・人間・社会	田中未来著	誠文堂新光社発行